尾崎翠「琉璃玉の耳輪」試論

森澤夕子

はじめに

「琉璃玉の耳輪」は、平成十年刊の『定本　尾崎翠全集』で初めて日の目を見た作品である。解題によるとペンネームは「丘路子」[1]とされ、阪東妻三郎プロダクションに送られたものであるという。発表には至らなかったものの、作品は完成されており、尾崎翠唯一の映画脚本として意義があるものと考えられる。まだ定まった評価の出ていないこの作品について、その成立背景の一端を明らかにするとともに、作品内容についての考察を加えたい。

一

「琉璃玉の耳輪」は昭和二年、翠が親友・松下文子に勧められ、京都太秦の阪東妻三郎プロダクションの募集に応ずる形で執筆された、未発表の映画脚本である。翠はのちに「映画漫想」（昭5・5・4～9）という随筆を発表するほどの映画好きであり、映画館を舞台とした作品も多い。しかし、「琉璃玉の耳輪」については、これまでに「エンターテインメント性の強い作品[2]」「かくされていた尾崎翠のもう一つの才能をここに発見することができる[3]」などという評価が出されたが、調査はまだほとんど手つかずの状態といってよい。まず、成立の背景から探ってみたい。

作品は「梗概」と本文十二幕から構成されている。あらすじを簡単に紹介すると、――主人公の女探偵明子は黒いベールを被った謎の婦人から、瑶子・璧子・琇子という三人の中国人姉妹の捜索を頼まれる。手掛かりは三人が身につけている琉璃玉の耳輪しか与えられないが、謎の婦人の協力も得て最後には三人を見つけ出す。実は謎の婦人とは、昔三人を捨てた母親・黄荔枝であった――という作

品である。映画用脚本ということを意識したものか、舞台は熱海・東京・横浜と次々に移動し、姉妹を幽閉する悪役の男との活劇があるなど起伏にとんだ筋立てとなっている。この頃翠が書いていた少女小説や、のちに書かれる代表作「第七官界彷徨」（昭和６・６）と比べても、エンターテイメント性が高い異色の作品である。同人誌や文芸雑誌に発表するときとは違い、映画の観客という不特定多数を意識して書かれたものであるからだろう。

作品が送られた阪妻プロダクションは、俳優・阪東妻三郎が起こしたプロダクションであるが、当時は大正十五年九月、アメリカの大手映画会社のユニヴァーサル社と提携する旨の契約を交わしたばかりであった。[4] 提携が発表された二ヵ月あとの「キネマ旬報」には「予告」[5] として阪妻立花ユニヴァーサル連合映画の広告がうたれており、力の入れ具合が伝わってくる。俳優の移籍の多い時代であるが、このとき阪妻プロにはそれまでの専属の俳優の他に、他プロダクションから大量の移籍があり、[6] 新入社員の紹介として広告がされている。[7] 阪妻プロの目玉である阪東妻三郎自身は、大手プロダクションの松竹との契約があったため、ユニヴァーサル社では主演映画を配給できないという事情があり、いわば新しいプロダクションのお披露目的な公募脚本映画を、女優中心の作品にしたのだと思われる。

最初の脚本の募集広告は、「キネマ旬報」昭和二年二月十一日号、[8] 二度目にほぼ同じ内容で昭和二年二月二十一日号[9] に掲載されている。表題に「金三千円懸賞映画脚本募集」として、「当プロダクションは今回左の規定に依り映画脚本を募集致し候間奮って御応募相成度候」と応募要件が書かれている。それによると、募集は甲と乙に別れており、甲は「英百合子、森静子、泉春子、五味国枝、高島愛子の本所専属女優五名のうち何れか一名を主演者として選び、その女優に最も適当せる七巻又は八巻物となし得る現代映画劇」、乙は「右五名を同一映画中に凡て出演者として使用し得る十二巻物の現代映画劇」とされている。『全集』の解題によると「琉璃玉の耳輪」は乙種作品として応募されたが、プロダクションから高島愛子主演の甲種作品として書き直してほしいと要望があったという。

賞金は甲種が一等五編につき二百円、二等十編につき百円、三等十編につき五十円で、乙種は一等一編三百円、二等二編二百円とされているが、はたしてこれは公募脚本の賞金の相場と比較してどれほどのものだろうか。この頃の公募脚本の例をいくつか挙げると、

- 大正十五年四月　内務省が映画筋書募集。一等三千円、二等二千円、三等千円。佳作十人に百円。[10]
- 大正十五年四月　文部省が映画劇脚本を募集。一等一人五百円、二等二人二百円、三等三人百円。[11]

・大正十五年六月　文芸春秋社が映画脚本を募集。二千円。[12]
・大正十五年十二月　中央映画社が未発表の創作・脚本を募集。採用された分に五十円と、撮影収利金。[13]

となっており、特に阪妻プロダクションのものが賞金が高いということではない。しかし昭和二年の一般企業の課長級の月給が百円、女性の場合だとタイピストが月給四十円、電話交換手が三十五円、会社の事務員となると三十円が平均だった[14]ので、定職についていない翠にとっては大金だっただろう。また、他の公募脚本の広告に比べ、阪妻プロのものは「金三千円」という賞金額が目立つように書かれている。実は三千円というのは賞金総額であって、各賞の賞金では他社にもっと高いものもあるのだが、インパクトの強い広告である。また、他の公募と違うのは、プロダクション自らが懸賞を出し、あらかじめ出演女優も決まっているなど、具体的なところである。女優たちから喚起されるイメージも、作品内容に大きく関わっているだろう。

阪妻プロは乙種で該当作がなかったとして、昭和二年五月、条件を変えて再度乙種の脚本を募集している。[15]当初の募集規定では五人の女優全員を使うこととされていたのが、この回の募集では「応募新規定」として、「英百合子、森静子、泉春子、高島愛子、及び新入社の西條香代子、伏見直江の六女優の内応募各位の好める所に隨ひ二名以上を共演せしむべき映画脚本を募集す」と条件がゆるやかに変えられている。俳優の入れ代わりが激しい時代を反映して、すでにこの時、翠が三姉妹の長女として設定した五味国枝は退社、かわりに新しく移籍してきた二人の女優の名前が追加されている。プロダクション側も「畢竟條件に比較して募集期間が短かきに過ぎた為めだろう」と認識したのである。最初の募集広告が昭和二年二月で、締切りが三月五日なので、確かに募集期間は短い。採用されなかったとはいえ、この期間に一つの脚本を完成させていた翠は、かつて考えられていたように「遅筆[16]」ではないと言える。同時に、今まで書いていたものとはがらりと作風を変えて、プロダクションの厳しい指定通りの脚本を書ける器用さも持ち合わせていたことになる。

さて、「琉璃玉の耳輪」は結局映画化されることはなかったが、もし映画化が実現していたら、検閲という問題が大きな壁となったであろう。『天皇と接吻　アメリカ占領下の日本映画検閲』によると、映画への検閲は明治四十一年に始まったとされるが、大正六年には警視庁が「活動写真興行取締規則」を公布し、これにもとづく検閲を始めた。つづいて大正十四年には全国統一の映画検閲に関する内務省令「活動写真フィルム検閲規則」が公布され、性的描写等が取り締まりの対象となった。男女の接吻や手をつないでいる場面

も許されなかったという。[17]

実際、「琉璃玉の耳輪」が書かれた昭和二年には日本物だけでも一二六四三メートルのフィルムが検閲にあい、[18]カットされている。中でも「淫蕩、卑猥ニ関スルモノ」であるとしてカットされたものが多いという報告もある。「琉璃玉の耳輪」の中では、長女・瑶子が同性恋愛者、三女・琇子を監禁するのが変態性欲の男・山崎であり、きわどいシーンもたびたびある。作品がそのまま映画化されていたとしたら、厳しい検閲を受けることになったであろう。

二

さて、次に内容について検討してみたい。「琉璃玉の耳輪」は五人の女優が演じることを想定して書かれた脚本であり、女優たちのイメージも作品に大きく関わっている。まず、五人のうち五味国枝と森静子の二人はそれまでも阪妻プロに所属していた看板女優であり、阪東妻三郎主演の映画にも多数出演している。このうち、五味は妖婦型、森は清純派の女優としてイメージが固まっていた。典型的なものでは大正五年の映画「幕末」で、主演が阪東妻三郎、妻三郎が思いを寄せる祇園の舞妓が森、彼女を殺してしまう妻三郎の年上の妻が五味という配役である。「森静子嬢の君香は十八番の役[19]」とされ、また五味もこの頃の評論で「あの顔と姿だけを、そのまま押し出しても、立派な妖婦型[20]」とされている。「琉璃玉の耳輪」では五味が三姉妹の長女・瑶子、森が三女の琇子という配役である。瑶子は旅興行の曲芸師を経て今は女スリという役どころであり、五味には適役だろう。それに対して琇子は上の二人の姉が片や女スリ、片や阿片窟の娼婦なのに比べ、悪役の男に幽閉されている可哀相な少女といった役回りであり、これもイメージ通りである。

しかし、最も女優の個性が生かされているのは、明子役の高島愛子であろう。高島愛子はデビュー前からフラッパーとして文壇、画壇で有名だったというが、デビュー後も得意の乗馬やオートバイでモダンガールぶりを発揮し、日本最初の冒険女優として名を上げた。[21]男装して自動車を操り、立ち回りの場面もある主人公・明子はまさにはまり役と言える。プロダクション側がこの作品を高島愛子主演作品として書き直すよう言ってきたのも納得できる。

この年、「キネマ旬報」の人気投票で第二位になった映画に、[22]「彼をめぐる五人の女」がある。題名の通り、一人の男性と五人の女性が繰り広げるコメディだが、実は阪妻プロの公募脚本が、最初に広告を出したとき、見開きの隣のページがこの「彼をめぐる五人の女」の広告であった。五人の女優はそれぞれ、令嬢—夏川静江、妖婦—梅村蓉子と言う具合に記されている。五人の女性と一人の女性ということで、あるいはこの人物造形なども「琉璃玉の耳輪」に影

響を与えている可能性もある。

無声映画の黄金期とも言われた時代であるが、内容別にみると、昭和二年の娯楽映画のうち、「探偵物」の本数は「人情物」「活劇物」「恋愛物」に続いて第四位を占めている。[23] その年公開された映画のうち、半数以上は「人情物」と分類されているデータによるが、それでも「探偵物」というジャンルが確立されていたとみることはできるだろう。例えば「琉璃玉の耳輪」に似た設定の作品として、これも女性名の脚本家による「探偵令嬢」（大15）という作品も公開されている。「琉璃玉の耳輪」は、翠の作品としては、時代背景や女優の個性など、外部からの要因が作品に影響していると言えそうである。つまりそれが、翠の他の作品と比べて異色なほどエンターテイメント性が高い作品になった理由だろう。

三

「琉璃玉の耳輪」では、場所の移動もさることながら、登場人物たちの衣装替えも頻繁に行われる。実際の撮影を前提としているためか、衣装の描写も翠の他の作品と比べて詳しい。そして、この次々と行われる衣装替えが、作品の魅力の一つである。ここでは、登場人物の服装の変化を手掛かりとして、作品を読んでみたい。

作品中で、五人の女性たちは五人ともが、何らかの形で変身・変装をする。仮に変装は単に身なりを変えること、変身は他のものに姿を変えることと定義すると、五人のうち変身しないのは琇子だけで、残りの四人はすべて変身している。

変身と変装とのより明らかな違いとして、変身したあとの存在に名前がつけられていることがあげられる。例えば、主人公の明子は、男装して「岡田明夫」と名乗り、瑾子は混血の娼婦「マリー」、瑶子は一瞬ではあるが貴婦人の「園田夫人」、そして黒いベールの婦人はもともと黄荔枝という名前だったものが、その前身を隠して「桜小路伯爵夫人」に変身し、さらに素性を隠した姿である。中には、変身後も同じ女優が演じるのを想定してであろうが、「明夫の明子」「マリーの瑾子」といった表現も見える。変装した人格に新しい名前がつけられているかどうかが、焦点になるかもしれない。

ただ一人、琇子だけは「銘仙絣」「水平服」と少年の恰好で登場するものの、それは琇子の意思ではなく、山崎にさせられているものである。この作品において、琇子はほとんど自分の意思を持たない。それは「お人形のよう」[24] ともてはやされた森静子が演じるヒロインとしては適役かもしれないが、この作品中にあっては、少々物足りない感もある。二人の姉が強烈な意思を持っているのに比べ、謎のベールの婦人の息子・公博が琇子を見初めたのもその美貌ゆえであり、人物としての魅力に欠ける。

明子は瑳子に近づくため、男装して「岡田明夫」という架空の宝石商になりすます。それが一度や二度ではなく、春から秋にかけて、しかもフロックコート・シルクハットの洋装から、銘仙の着流しまでさまざまな衣装で瑳子の前に現れる。いくら断髪とはいえ、現実に女性が同じ女性をそれほど長い間騙しつづけられるかという問題が出てきかねないほど、過剰な変身である。

過剰と言えば、髪を染め、眉や睫毛を茶褐色にしてまでマリーを演ずる瑳子も同じである。瑳子の場合、もともと山崎の目をごまかすために変身しているのに、一度それが山崎に悟られたあとも同じマリーの姿で過ごしている。うら若い女性二人が、それぞれすっかり顔かたちを変え、紳士・明夫と仏蘭西と日本との混血の娼婦・マリーとして逢瀬を重ねる。男装の麗人という倒錯した色気とともに、恋人として会っている二人が二人とも本来の姿ではないという危なっかしさ、どの姿を信じてよいのかわからない不安定さがまたこの場面の大きな魅力だろう。

公博もマリーのあとをつけたり、山崎の家に忍び込んだりと秘密めいた行動をとるが、彼は変装しない。女性にだけ変身・変装させ、男性には変装させないという所から、翠自身の願望が投影されているとも推測される。大正九年に雑誌「新青年」が創刊されたのをはじめ、探偵趣味は広がって行ったが、もともと変装は秘密の行動をとる探偵にはつきものであった。その意味では、探偵物というジャンルは変身願望を満たすのにうってつけだったといえる。

では、なぜ彼女達は変身するのだろう。衣装を変える理由はというと、他者から見つからないようにするためであり、他者を欺くためである。しかし、「東洋人から白人への、中華料理店店主夫人から伯爵夫人への、そして女性から男性への、変身願望がさまざまな形で顕れている」[25]とされるように、その変身は本来の必要以上のものである。大きな変身をする三人を中心に考えると、明子は性別、瑳子は人種、婦人は社会的な身分を偽り、姿を変える。彼女たちは、それぞれ女性から男性、中国人から日本人と仏蘭西人の混血、中華料理店店主夫人から伯爵夫人と、当時一般的に社会的地位がより高いと思われる存在へと変身している。また、こうしていろいろな変身のパターンが登場するが、年齢を変えるというパターンはあらわれないことも、注目に値するだろう。

さらに、この作品中では、次々と変身が行われ、自己は簡単に形を変えられるものとして描かれている。自己はすぐに他者となることができ、自己・他者の区別が通常より曖昧であると言えるかもしれない。後年の「第七官界彷徨」では人間と植物とが同じような筆致で描かれることで、「人と物との差異を曖昧にした」[26]とされているが、「琉璃玉の耳輪」の変身の意識も後の作品に通じるものでは

ないだろうか。

次に、登場人物の服装を違った視点から考える。手掛かりとするのは、ラストシーン近くの十二幕で、婦人が無事居所がわかった三人の娘と、そのために奔走した明子に、全員が顔を合わせる日のために晴れ着を贈ることである。全員が晴れ着を来てホテルに集合するのだが、最後まで自分を捨てた母を許せなかった次女の瑳子は、その晴れ着を「肩が凝る」と言って脱ぎ捨て、ホテルを去る。また、既にスリの一味として仲間を裏切ることができない瑶子も、母に別れを告げて仲間とともに去って行く。晴れ着は、三人にとって母親の愛であるとともに、家族であることを強要するものだったのである。つまり、この話は母に捨てられた子供たちが、母と再会し、改めて母親離れする話だとも解釈できる。また、結婚相手の山崎を捨てて違う恋人と駆け落ちする瑳子は、ト書きで「生来淫奔であった」とされている。これは母親の黄荔枝が、夫と三人の幼い娘を捨てて恋人と駆け落ちしたことと重なる。つまり、婦人も「淫奔」の故に罰が下ったのであり、作中にも「因果の、応報」という表現で明らかにされている。

二人の姉が去って行ったのに対し、三女の琇子だけが「私はどこにも行くところがありません」と母の側に残る。琇子は最後には公博と結婚する事が暗示されているが、結婚前の女性として母から贈られた晴れ着は、最高の礼装である。翠の作品では恋愛が成就することは珍しく、このように結婚まで書かれている作品は他にはない。その意味でも、「琉璃玉の耳輪」は翠の他の作品と一味違っている。

しかし、もともと公博は婦人の現在の夫である桜小路伯爵の息子であり、琇子とは義理の兄妹にあたる。これは翠の作品で繰り返される「兄と妹の恋愛」のバリエーションだと考えられる。婦人は、公博が結婚し、自分たちが隠居する前に娘たちを捜し出したいと、今まで公博の縁談をたびたび断ってきたことが作品の冒頭でも説明されている。琇子を見初めたのは公博の意思であるが、「降るようにあつた」息子の縁談を断り続けたことによって、夫人は間接的に「兄と妹の恋愛」に手を貸したことにも注目したい。

一方、明子にとってこの晴れ着はどんな意味を持つのか。明子は東京控訴院の岡田検事令嬢でありながら、女探偵として活躍している。日本初の女探偵は大正十一年に記録されているが、[27] 昭和二年当時としてもかなり前衛的な職業であっただろう。明子は、公博にふられてからは、恋より仕事だと自分に言い聞かせて仕事に励む。もちろん探偵社から月給はもらっているのだし、社会人として独立しているといっていいだろう。先に紹介した女探偵は「収入は平均八十円、其他の雑収入を合せて百円は充分」とされているが、明子もこの仕事で月給百円をもらう。そして、明子の普段の服装は活動的

な洋装である。

しかし、そんな明子も黒いベールの婦人から贈られた晴れ着を着てホテルに集まり、最後の場面では黒いベールの婦人こと桜小路伯爵夫人とその夫から、このように言われる。

「あなた、岡田さんの、お娘（ママ）さんには、大変、お世話になりました。」

「おう、誠に、有難う、偉い娘さんぢや」

車を乗り回し、悪党との活劇を演じ、男装までして探偵の仕事をしてきた明子も、最後の場面では「岡田さんのお娘さん」という立場に戻ってしまうのである。まるで、シンデレラの魔法がとけたように、いろいろな活躍をしてきた明子は、この場面にあっては「誰々の娘」という存在でしかないことが暴露される。いきいきと活動していたヒロインは、こうして家庭のなかに吸収されてしまったのである。

この時の彼女の服装もそれと無関係ではない。明子のふだん着の活発な洋装なら、彼女の性格・社会的立場などをあらわしているが、この時の明子は夫人から贈られた、夫人の娘たちとお揃いのお仕着せの晴れ着である。もちろん、和装であり、璧子にとっては「肩が凝る」服装である。未婚の女性の晴れ着ということで、これは振袖だと思われるが、まさに「お娘さん」を表した服装なのである。三姉妹と同じ衣装を着ることで、明子の個性は見えにくくされる。さらにいえば、「岡田さんのお娘さん」と呼ばれることで、冒頭の「二十五歳の今日、未だに、良縁を結ばうとせず、あたら、一生の花時を、失つてしまふのではあるまいか、之も、両親の、子に甘過ぎる故」という説明が思い起こされる。

夫の桜小路伯爵に声をかけられた夫人が、あわててとりつくろう態度が描かれているが、夫人は三人の娘の内「一人しかみつからなかった」と言うのであり、「三人とも見つかったが、二人には去られてしまった」とは言わない。一人だけでも見つかったのなら、二人が去ったことは隠しておいたほうが、都合がよいからである。また、自分の意に染む娘は一人しか見つからなかったのだとも解釈できる。夫人はもともと全員が集まるホテルを「幸福の待つてゐるホテル」と呼ぶなど、「幸福」に対する執着が強いことが示されている。こうして自分の失われた家族のハッピーエンドを作ろうとし、明子との関係も、家族と家族の関係にすり替えてしまったのである。

翠の代表作「第七官界彷徨」は家族の中で展開される「女の子」の物語であるが、「琉璃玉の耳輪」も黄荔枝を中心とする家族の物語だと言える。「第七官界彷徨」の主人公・町子は常に兄や従兄から「うちの女の子」と呼ばれることで、家庭のなかに帰っていくが、町子にとっての家庭とは「独自の小宇宙」[28]であり、居心地のよい場

所である。しかし、「琉璃玉の耳輪」の明子にとっての家庭とは、「一生の、花時を失って」結婚もせずにいるという他人の噂に傷つけられる場所となる。「第七官界彷徨」が自分の位置を家庭内で見つけ出した「女の子」の物語だとすると、「琉璃玉の耳輪」はその過程にある物語だと言える。

おわりに

「琉璃玉の耳輪」は公募の脚本として書かれただけあって、尾崎翠の中ではわかりやすい作品である。発表に至らなかった経緯は明らかではないが、従来の尾崎翠のイメージを打ち破る作品と言えるだろう。しかし、そこには翠の作品にたびたび出てくる「兄と妹の恋愛」が秘かに存在し、「変身願望」も強く表れているところが翠らしい。この作品が映画化されていたら、あるいは翠は脚本の方向に進んだかもしれない。しかし、脚本が送られた阪東立花ユニヴァーサル連合映画は、提携後一年ももたず、昭和二年五月に破局を迎える。[29] そして、「琉璃玉の耳輪」の原稿は人目にふれることなく、七十年以上も松下文子が保管することになった。尾崎翠研究はまだ発展途上であり、埋もれている作品の発掘をも含めて、人気作品以外の研究も待たれるところである。

注

① 『全集』の解題によると、「琉璃玉の耳輪」と「香りから呼ぶ幻覚」（昭2・2頃）の二作品は「丘路子」の筆名で書かれている。

② 群ようこ『尾崎翠』第三章：友情と恋、八五頁（平10・12・20、文芸春秋）

③ 稲垣眞美「解説」『全集』四九二頁

④ 田中純一郎『日本映画発達史』第二巻・第二九節「時代劇映画、一世を風靡す」、九〇頁～九三頁（昭55・3・20、中央公論社）

⑤ 「予告」（「キネマ旬報」244号、大15・11・1）をはじめ、数度掲載されている。なお、この予告の掲載された次の号に「日本映画飛躍の機熟す」（「キネマ旬報」245号、大15・11・11）として「阪東妻三郎プロダクション　一立商店」名の広告も掲載されている。

⑥ 「花形俳優を続々迎へる大日本ユニヴァーサル」（「キネマ旬報」245号、大15・11・11）として、「本月初旬松竹蒲田の人気俳優英百合子嬢を初め、（中略）約三十名及監督鈴木重吉氏の引抜きに成功し、一方『我は海の児』に主演した高島愛子嬢の入所も決定した」と伝えられている。

⑦ 「入社御披露」（「キネマ旬報」247号、大15・12・1）として、英百合子、高島愛子、泉春子を含む九人の俳優の顔写真が掲載されている。

⑧ 「金三千円懸賞映画脚本募集」（「キネマ旬報」252号、昭2・2・11）

⑨ 「金三千円懸賞映画脚本募集」（「キネマ旬報」253号、昭2・2・21）

⑩ 「内務省と文部省とが映画脚本懸賞募集」（「キネマ旬報」234号、大15・4・11）

⑪ 注⑩に同じ

⑫ 「映画時代　七月創刊号」広告（「キネマ旬報」239号、大15・6・1）

⑬ 「日独連合映画製作に就て」（「キネマ旬報」247号、大15・12・1）

⑭ 岩崎爾郎『物価の世相100年』六〇頁、二八八頁（昭57・7・15、読売

新聞社）

⑮「金三千円懸賞映画脚本の内『乙種脚本』募集締切延期！」（『キネマ旬報』261号、昭2・5・11）。この中で、「甲種脚本は予定通り全二十五篇を選び『阪妻画報』六月号誌紙上を以て発表致し」、乙種の該当作も「八月上旬発行の『阪妻画報』誌上」で発表するとされているが、「阪妻画報」は今回確認できなかった。

⑯ 林芙美子「尾崎翠回想」（稲垣真美編『尾崎翠全集』所収、五一六頁、平4・6・25、創樹社）

⑰ 平野共余子『天皇と接吻　アメリカ占領下の日本映画検閲』第一部：戦争から占領へ、三一頁～三四頁（平10・1・20、草思社）

⑱ 内務省警保局「昭和三年六月　活動写真フイルム検閲年報」（『復刻版活動写真「フィルム」検閲年報』所収、六一頁、昭59・10・20、龍渓書舎）

⑲「主要日本映画批評」（『キネマ旬報』230号、大15・6・11）

⑳ 武田鱗太郎「阪東妻三郎について」（『映画往来』3巻1号、昭2・1・1）

㉑『日本映画人名事典　女優篇』（下）、「高島愛子」の項、二四頁（平7・8・25、キネマ旬報社）

㉒ 谷川義雄『年表・映画100年史』七一頁（平6・5・31、風濤社）

㉓ 内務省警保局「昭和三年六月　活動写真フイルム検閲年報」（『復刻版活動写真「フィルム」検閲年報』所収、一八頁、昭59・10・20、龍渓書舎）

㉔ 注⑳に同じ

㉕ 注③に同じ

㉖ 高原英理『少女領域』第四章：少女の作る小宇宙　尾崎翠『第七官界彷徨』、一三四頁（平11・10・25、国書刊行会）

㉗「「女探偵」と云ふ新職業」（『処女地』2号、大11・5・1）

㉘ 高原英理『少女領域』第四章：少女の作る小宇宙　尾崎翠『第七官界彷徨』、一三〇頁（平11・10・25、国書刊行会）

㉙ 注④に同じ

（付記）

底本には、『定本　尾崎翠全集』全二巻（稲垣眞美編、平10・9・15～平10・10・15、筑摩書房）を使用した。本文では『全集』と略記した。引用に際しては、原則として旧漢字を新漢字に改めた。